

「イスラエル」と「教会」に対する神の「奥義」

—神のご計画の全体を、余すところなく知るために—

ベレーシート

●今回のテーマは、「イスラエル」と「教会」に対する神の奥義とその関係についてです。実はこの両者の関係に対する理解が、私たちが聖書を理解する際の「理解の型紙」となっているのです。私たちは歴史的産物であるために、自分が教えられて来た「理解の型紙」を無意識のうちに持っています。しかもその型紙が自分の思考を支配していることになかなか気づかないものです。「よく、目からうろこが落ちる」という表現を使いますが、それは自分のうちにあった一つの「理解の型紙」が破られる経験です。心を柔軟にして自分の「型紙」を疑ってみることは、神の真理を捜し求める者が身に着けなければならないひとつの資質なのではないかと思います。

(1) イスラエルに対する神の奥義

●私が開拓伝道をして数年たった1994～1995年の一年間、ローマ人への手紙の講解説教を試みました。ところが9～11章をあえて飛ばしました。なぜなら、その部分は「魚の骨」のような部分だと教えられていたからです。「魚の骨」の部分は魚を食べる時には取り除かねばなりません。ところがある時、「魚の骨」の部分はその部分がなければ魚にならない極めて重要な部分だと気づかされたのです。ヘブル語の「骨」(「エツェム」)は事柄の本質を意味します。そのことに気づかされた私は「目からうろこ」の体験をしました。そして昨年(2017年の夏)、改めてこの部分を本格的に学びました。パウロはなにゆえ9～11章を書く必要があったのでしょうか。カトリックの司祭のK. ワルケンホースト氏は、ローマ書の注解において「万民とイスラエル」と題する9～11章の解釈から始めています。それはこの部分の理解なしには神のご計画の全体像を知ることは不可能と言えるからです。そして、ローマ書1～8章は神によって約束された全イスラエルにおよぶ恵みとして捉えることで、ローマ書をよりよく理解できるとしています。パウロは異邦人に福音を伝えるべく召された使徒ですが、彼の生涯の熱意は最後まで何とかして同胞であるユダヤ人に御国の福音を伝えることでした。しかし彼の熱意とは裏腹に、同胞のユダヤ人たちは彼の言うことに耳を傾けませんでした。そのことも神のみこころであると彼は悟ったのですが、神のご計画によって、彼らが必ず御国の福音を悟る時が来るということをも啓示されていたのです。そこで今回は、ローマ人への手紙の9～11章、とりわけ11章の中からパウロが「奥義」として啓示された部分を中心に、「イスラエル」と「教会」との関係について考えてみたいと思います。その中心聖句を25～27節としました。

【新改訳2017】ローマ人への手紙11章25～27節

25 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えないようにするために、この奥義を知らずにいてほしくは

ありません。**イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、**

26 「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬度を除き去る。

27 これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。

【新共同訳】ローマの信徒への手紙 11 章 25～27 節

25 兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような**秘められた計画**をぜひ知ってもらいたい。すなわち、

一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、

26 こうして全イスラエルが救われるということです。次のように書いてあるとおりです。「救う方がシオンから来て、
／ヤコブから不信心を遠ざける。

27 これこそ、わたしが、彼らの罪を取り除くときに、／彼らと結ぶわたしの契約である。」

●この神の奥義によって、不信仰で頑ななイスラエル人(ユダヤ人)は決して神から捨てられた存在ではなく、やがて奇蹟的に回復することが神の秘められた計画であるということが教えられています。

(2) 教会に対する神の奥義

●次に扱うべきことは、「教会」に対する神の奥義です。それはエペソ書 3 章 6 節に記されています。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 3 章 6 節

それは(=奥義とは)、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。

●つまり、もう一つの神の奥義とは、異邦人とユダヤ人が共同の相続人となって、ともに神の約束にあずかることです。教会とはユダヤ人と異邦人から成る共同体であり、パウロの表現によれば「新しいひとりの人」(One New Man)なのです(エペソ 2:15)。初代教会の人々にとって、教会がユダヤ的な根(ルーツ)を持っているというのは当然のことでした。ところが、ローマ皇帝コンスタンティヌスの回心以来、教会は長い間、ユダヤ的ルーツを失ってきたのです。今日、このユダヤ的ルーツの回復こそが教会にとって必要不可欠なのですが、その意味が正しく理解されていないのが現状です。

●異邦人伝道に召されたパウロは福音を伝えるのにギリシア語で伝えましたが、その福音の内容はイエシュアと同様、ユダヤ的ルーツをもった概念であったはずですが、しかしコンスタンティヌス帝は、教会をユダヤ的ルーツから切り離しただけでなく、異教と結びつけてしまったのです。このことは、昨今、周知されつつある事実です。今回はこれ以上触れることができませんが、重要な事柄です。

(3) 「奥義」を知ることの重要性

●パウロは「イスラエル」についても、「教会」についても、「奥義」(新共同訳は「**秘められた計画**」)とい

う言葉を使っています。パウロは「この奥義を知らずにはいてほしくない」と言っています。「奥義」という言葉は旧約聖書にはありませんが、新約聖書では28回使われています。そのうちの21回が使徒パウロによって使われています。「奥義」というギリシア語の「ミステリーオン」(μυστήριον)は、「秘密、秘められたもの、隠されていたもの」という意味です。パウロは自分自身を「神の奥義の管理者」と呼んでいるほどに、神の秘められた計画を多く啓示された人でした。その「奥義」(「ミステリーオン」μυστήριον)の中から、今回は「**イスラエルに対する神の奥義**」と「**教会に対する神の奥義**」について取り上げたいと思います。この奥義について正しく理解することが、神のご計画と神のみこころを知る上できわめて重要なことと思われます。

●私たちにとっての霊的な祝福を求めようとする態度から距離を置いて、純粹に、神がなしたいと考えておられるご計画に目を留めるべきです。そうでなければ、イスラエルと教会との関係が、本来の神のみこころからのはずした関係となってしまうからです。この二つの奥義を考える上で、パウロがローマ書11章で語った実り豊かな「**オリーブの木のたとえ**」が役立ちます。

1. オリーブの木のたとえ

【新改訳2017】ローマ人への手紙11章16～18節

16 麦の初穂が聖なるものであれば、こねた粉もそうなのです。根が聖なるものであれば、枝もそうなのです。

17 枝の中のいくつかが折られ、野生のオリーブであるあなたがその枝の間に接ぎ木され、そのオリーブの根から豊かな養分をともに受けているのなら、

18 あなたはその枝に対して誇ってはいけません。たとえ誇るとしても、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。

●ここでパウロは「麦の初穂が聖なるものであれば、こねた粉もそうなのです。」というヘブル的慣用句を用いて、その関係をオリーブの「根と枝」にも適用しています。ここでは、オリーブの木に対して、3種類の枝があります。

- ①オリーブの根(台木)・・・イスラエル、および神がイスラエルと結んだ神の契約、それに対する信仰。
 - ②オリーブの枝・・・根から自然に生え出たメシアニック・ジュー(イエシュアを信じる初代教会のユダヤ人)。
 - ③折られたオリーブの枝・・・イエシュアを信じなかったユダヤ人。彼らは不信仰によって祝福を失った。
 - ④接ぎ木された野生のオリーブの枝・・・異邦人のクリスチャン。
- ※②と③のユダヤ人を「栽培種のオリーブの枝」とも呼んでいます。

●②と④が「教会」の構成メンバーです。異邦人であるクリスチャンは「接ぎ木された」枝として、すべての祝福を台木であるオリーブの根から受け取っています。それゆえ、パウロは異邦人クリスチャンに対して、「あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです」(18節)と注意を与えています。根とは、イスラエルを通して与えられる神のご計画とみこころ、御旨、目的、そして神の契約の豊かな

祝福を含んでいます。「以前は遠く離れていた異邦人である私たち」が「メシアの血潮によって近い者とされた」のですから、異邦人クリスチャンはユダヤ人(イスラエルの民)に対して誇ってはならないと教えているのです。

(1) ローマ書 11 章における論理展開

●ローマ人への手紙 11 章を整理してみると、イスラエルの民に対して次のような論理展開があります。

- ① 神はイスラエルの民を退けてしまわれたのか。絶対にそんなことはありません(1 節)。
- ② イスラエルのある者は頑なにされた。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょう。絶対にそんなことはありません(11 節)。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。
- ③ イスラエルの背きが世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らがみな救われることは、どんなにすばらしいもの(=「死者の中から生き返る」ことに等しい)をもたらすことか(12 節)。
- ④ 教会はすでに信仰によって接ぎ木され、不信仰によって折られたイスラエルはやがて同じ台木に接ぎ木されます(17～24 節)。
- ⑤ イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、イスラエルはみな救われます(25～32 節)。

(2) イスラエルの「残りの者」

●パウロはローマ書の中で「ユダヤ人」という言葉を 11 回使っています。そのうち 9 回は 1～3 章に、あとの 2 回は 9 章 24 節と 10 章 12 節です。一方、9～11 章にのみ使われている「イスラエル」という言葉は 12 回使われています。そこでの「イスラエル人」とは、アブラハムから始まる神の約束の子孫を意味しています。しかしパウロは「イスラエルから出る者がみなイスラエルなのではない」として、神のご計画のために選ばれたイスラエルは「残りの者」だけであることを述べています(ローマ 9:27)。そのことを 11 章では「一部のイスラエル人」としています。

(3) 「異邦人の満ちる時が来るまで」

●ただし、「イスラエル人の一部が頑なくなつたのは異邦人の満ちる時が来るまで」(新改訳 2017)とあります。「異邦人の満ちる時が来るまで」は他の訳では次のようになっています。

口語訳「異邦人が全部救われるに至る時まで」、新共同訳「異邦人全体が救いに達するまで」
新改訳改訂第 3 版「異邦人の完成のなる時まで」

●「異邦人の満ちる時が来」て、イスラエルの「彼らがみな救われることは、どんなにすばらしいものをもたらすことでしょう。」(11:12)とパウロは述べています。そして「彼らが受け入れられることは、死者の中からのいのちでなくて何でしょうか。」(11:15)とも述べています。彼らが受け入れられる(救われる)ことは、死者からの復活ではありませんが、それはまさに死者からの復活に等しいと言っているのです。こ

のことは後でエゼキエル書 37 章の「枯れた骨が生き返る」預言のところで触れます。

2. イスラエルの回復をもたらす「新しい契約」

●神の奥義であるイスラエル(残りの者)がみな救われるということは、つまり 27 節にある「**彼らと結ぶわたしの契約**」が実現されることを意味します。「彼らと結ぶわたしの契約」とは何でしょうか。「彼ら」とはイスラエル全家で、「わたし」とは神ご自身です。さらに「契約」が単数であり、「わたしが彼らの罪を取り除く」ことと関連ある契約と言え、エレミヤ書 31 章 31 節に預言されている「**新しい契約**」の他にはありません。

【新改訳 2017】エレミヤ書 31 章 31 節

見よ、その時代が来る——【主】のことは——。

そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。

●この「**新しい契約**」は「イスラエルの全家」、すなわち「イスラエルの家とユダの家と結ばれる契約」のことです。この契約がイスラエル全家に成就するまでは、「イスラエル人の一部が頑なになる」ということです。「イスラエルの一部」とはイスラエルの「残りの者」(レムナント)と言われる人たちのことですが、「残りの者」であったとしても、イスラエル(ユダヤ人)が「民族的に救われる」という契約が「**新しい契約**」なのです。

●神がイスラエルの家とユダの家との間に結ばれる「**新しい契約**」は、エレミヤ書のみならず、旧約聖書において最も核心的な箇所です。「**新しい契約**」という言葉は、旧約においてはここエレミヤ書の 31 章 31 節のみですが、これは「**オリーブの木**」の台木であるアブラハム契約、シナイ契約、モアブ契約、ダビデ契約の流れを引き継ぐものです。この「**新しい契約**」の特質とはいったい何なのか、御言葉から思い巡らしてみたいと思います。

(1) 「見よ。その日が来る」というフレーズ

●「見よ。その日が来る」というフレーズ(原文では「見よ。そのような日々が来る」と複数になっています。新改訳 2017 では「見よ、その時代が来る」と訳しています)は、旧約で 10 回使われていますが、そのうちの 7 回がエレミヤ書です(9:25/23:5/30:3/31:27, 31, 38/33:14)。他にはアモス書が 2 回(8:11/9:13)、そしてマラキ書が 1 回(4:1)です。エレミヤ書の 7 回のうち最初の 9:25 を除けば、あとはみな終末的預言です。

- ① その日には、イスラエルの家とユダの家に、建て直し、植えるための「種」が蒔かれる(27~28 節)。
- ② その日には、「だれでも、酸いぶどうを食べる者は歯が浮く」(つまり、父の犯した咎の責任を子が問われることがなく、それぞれが自分の犯した咎の責任を問われる)ようになる(29~30 節)。
- ③ その日には、主がイスラエルとユダの家とに、新しい契約を結ぶ。しかもその「**新しい契約**」によっ

て、創造世界の秩序が不変であるように、神とイスラエルとの絆も不変となる。しかもそれは絶対的な恩寵に基づくものである(31～37節)。

- ④ その日には、エルサレムが主のために建て直され、永遠に根こそぎにされることも、壊されることもない(38～40節)。

(2)「新しい契約」の三つの特性

●31章31節に初めて登場する「新しい契約」の特質として、以下のようにまとめることができます。



① 内面性

●33節に「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書き記す」とあります。それはモーセの石に書かれた神の律法のように外からの義務や強制によるものではなく、内からの意志—自発性、主体性、自立性—によって神の律法(トーラー/みおしえ)を守り、従おうとすることです。この内面的な意志によって、「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」ことが可能となる契約です。

② 個人性

●その日には、「だれでも、酸いぶどうを食べる者は歯が浮く」(30節)とあるように、父の犯した咎の責任を子が問われることがなく、それぞれが自分の犯した咎の責任を問われるようになります。また、34節に「人々はもはや、『主を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。」とあります。「身分の低い者から高い者まで」というのはヘブル的表現で、「すべての者」を意味します。その日には、すべての者が直接的に主を知るようになるのです。

③ 完全な赦罪

●同じく34節に「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さない。」とあるように、完全な赦罪(しゃざい)があるということです。これは本来契約関係においては絶対にあり得ないことなのです。律法なしの契約というものはありません。律法は良いものであり、正しくなければなりません。しかもその律法には契約の内容が記されています。問題はそれを守り切れないという人間側の矛盾性にあります。使徒パウロはそのことで悩みました。ローマ書7章にはこの矛盾と葛藤の悩みが記されています。

●人間の罪の現実性と矛盾性に対する深い掘り下げなしには、神の「赦罪」を正しく理解することは困難です。罪や咎に対する神の赦しは「二度と思い出さない」(記憶しない)という驚くべき恵みです。

●また神の「赦罪」の動機は、エレミヤ書31章20節に記されています。

【新改訳 2017】エレミヤ書 31 章 20 節

エフライムは、わたしの大切な子、喜びの子なのか。わたしは彼を責めるたびに、ますます彼のことを思い起こすようになる。それゆえ、わたしのはらわたは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。――

【主】のことば――

●上記のフレーズの「わたし」は主であり、「彼」とはエフライム、すなわち北イスラエル(10部族)のことです。主は北イスラエルの部族のために「はらわたがわななく」(=「あわれまずにはいられない」と同義)とあります。なぜなら、神にとってエフライムは「長子」(かけがえのない存在)だからです(31:9)。これが「新しい契約」における神の動機と言えます。「はらわた」(内臓)とは感情が生じる場所として考えられていました。その部分が「わななく」のです。この「わななき」と訳された原語は「ハーマー」(הַמָּהַר)で、「騒ぐ、荒々しくする、吠えたける、大声で叫ぶ、動乱する」という意味であり、この言葉には「痛み」と「愛」が入り混じっている、と日本の神学者である北森嘉蔵氏は断言しています。それゆえ「ハーマー」(הַמָּהַר)を「**痛み**に基礎づけられた**愛**」と表現しています。この言葉から(イザヤ書 63:15 の「ハーマー」も加わって)「神の痛みの神学」が構築されたことは有名です。

(3) 「新しい」は「王なるメシア」のヘブル的概念

●「新しい契約」(「ベリート・ハダーシャー」 בְּרִית הַדָּוָד)について、エレミヤはその方向性だけを指し示しています。その契約を成立させる仲介者もその方法についても一切不透明です。しかし「新しい」を意味するヘブル語の「ハーダーシュ」(חֲדָשׁ)という言葉は、実は、「王の出現」と「王の統治」と深い関係を持っています。この「ハーダーシュ」(חֲדָשׁ)の初出箇所は出エジプト記 1 章 8 節で、「やがて、ヨセフの知らない**新しい王**がエジプトに起こった」で使われています。この「新しい王」はこの世の王であり、イスラエルの民を窮地に陥れるエジプトの王ですが、それは同時にイスラエルの民に対して、主なる神、イスラエルの神こそエジプトの王に勝る「**とこしえに続べ治められる王**」であることが啓示されるのです。

●神の統治はエジプトの王パロの心のかたくなさに見られます。「神の力と神の名を全世界に告げ知らせるために」、神がパロを立て、彼の心をかたくなにされたのでした。つまり、エジプトの王であるパロさえも完全に神のご計画の道具とされているのです。新しい王が「エジプトに起こった」ことは神の主権によるものです。そのことを私たちは認めなければなりません。歴史の中に貫かれている神中心の思想、これが人間中心的思想(ヘレニズム)と対峙する神中心の「ヘブライズム」です。

●このように「新しい」を意味するヘブル語の「ハーダーシュ」(חֲדָשׁ)は、**王なる神の権威と密接な関係**があるのです。新約の「新しい契約」「権威ある新しい教え」「悪霊を追い出す新しいことば」「新しい戒め」といった言葉の「**新しさ**」は、すべて王的権威をもった方、御国の王であるメシア・イエシュアによってもたらされるのです。ちなみに「ハーダーシュ」の動詞「ハーダシュ」(חָדַשׁ)は本来王政(王国)を「樹立する」「一新する」ことを意味しています(初出箇所は以下の通り)。

【新改訳 2017】Iサムエル記 11章 14節

サムエルは民に言った。「さあ、われわれはギルガルに行って、そこで王政を樹立しよう(צִדִּיק)。」

●イスラエルの家とユダの家とに対して、その「新しい契約」が完全に結ばれるのはこれからのことです。つまり「見よ。そのような日々が(必ず)来る」という終末論的希望なのです。なんとという驚くべき神の約束でしょうか。またこの希望を、使徒ペテロは「生ける望み」、使徒パウロは「栄光の望み」「永遠のいのちの望み」「祝福された望み」と言い表しており、教会はその霊的祝福を与えられているのです。

3. イスラエルの回復の預言

(1) エゼキエル書 37章の「枯れた骨が生き返る」という預言

●イスラエルの回復の預言は旧約聖書の中に数多くありますが、それがどのようにして成されるのか、「枯れた骨が生き返る」ことを預言したエゼキエル書 37章を通して学んでみたいと思います。「イスラエル」をそのままイスラエルとして捉えることによって、旧約の預言がより正しく理解されるからです。「枯れた骨」とは「イスラエルの全家」のことを意味しています。

●イスラエルの全家とは、すでにアッシリヤによって離散した北イスラエルの 10 部族と南ユダ部族のことです。「非常に多くの集団」なのですが、これらに息が吹きかけられると、息が彼らの中に入って、彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった幻をエゼキエルは見せられたのです。神は彼らを彼らの地に住みつかせると約束しています(14節)。21節にはこう記されています。

【新改訳 2017】エゼキエル書 37章 21節

彼らに告げよ。『【神】である主はこう言われる。見よ。わたしはイスラエルの子らを、彼らが行っていた国々の間から取り、四方から集めて彼らの地に導いて行く。』

●37章は、イスラエル全家の回復のことが述べられている箇所です、個人的な魂の覚醒や教会のリバイバルが語られている箇所ではありません。にもかかわらず、そのように語られてきたのは、キリスト教の歴史において「置換神学」(契約神学)が教えられ、「個人的救い」が強調して教えられてきたからです。置換神学は「イスラエルの全家」をありのままに理解せず、「私」とか「教会」に置き換えて解釈することで、神のご計画を見失わせてしまう解釈です。そのために、預言者たちが語っている神のご計画の啓示を正しく理解できません。すべてのみことばを自分たちに直接語られたものとして捉えてしまうからです。預言は私的解釈を施さず、ありのままに理解しなければならないのです。と言う私も、そうした解釈をしてきた一人なのですが・・・。

(2) 天の御国の鍵となる語彙「カーラヴ」

●ヘブル語の「カーラヴ」(קרָב)は「イスラエルの回復」において重要であるばかりでなく、「天の御国」(神の国)を理解する上でも非常に重要な語彙です。イエシュアは「**天の御国が近づいた**」と宣教を開始されました。しかし同時に、「**天の御国はすでにここにある**」とも言われました。

【新改訳 2017】マタイの福音書 12章 28節

しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。

(※並行記事のルカ 11章 20節では、「神の御霊」は「神の指」となっています。)

●天の御国(神の国)が「近づいた」、そして同時に「すでに来ている、あなたがたのただ中にある」という二つの現実をイエシュアは語っていますが、ギリシア語の「近づいた」という言葉には「エツギゾー」(ἐγγίζω)の**現在完了形**が使われています。ギリシア語の現在完了形とは、過去になされた出来事の結果の状態が現在も続いていることを表わします。つまり、その現在完了形によって「御国」がすでに来ていることを意味しているのです。それゆえイエシュアは、神に「立ち返る」「向き直る」ことをたえず**現在命令形**で命じているのです。しかしいまだ、イエシュアの再臨までは、天の御国は完全な形では完成していないのです。

●「すでに、いまだ」、一体どちらが正しいのかをめぐる神学論争も起きているほどです。しかしヘブル語の「カーラヴ」(קרָב)は、なんとこの両方の意味を兼ね備えているとても不思議な語彙なのです。

(1) 動詞「カーラヴ」(קרָב)・・・「近づいた、(ふたつのものを近づけて)つなぐ」

(2) 名詞「ケレヴ」(קרָב)・・・「中、内、ただ中」

(3) 形容詞「カーローヴ」(קרָוּב)・・・「近い」

●イザヤが女預言者である妻に「近づいた」とき、彼女はみごもったとあります(イザヤ 8:3)。そこから、単に距離的に近づいたという意味だけでなく、「～の中」にあるという一体の状態をも意味しています。その意味において、イエシュアは「もう神の国はあなたがたのただ中にある、あなたがたのところに来ている」(マタイ 12:28/ルカ 17:21)とも語っているのです。「カーラヴ」(קרָב)は、神のご計画における「**いまだ**」と「**すでに**」という時系列の緊張関係を表わすことのできる、まことに不思議な語彙なのです。このような意味を持っている語は他にありません。ヘブル語はまさにイエシュアを通してなされる神のご計画を正しく表現できる、神が選んだ聖なる言語と言えます。

●さらには「カーラヴ」(קרָב)は、イスラエルの地に全イスラエルが回復するときにも重要な意味を持っています。神はそのことを「**二つの杖をつなぎ一本の杖とする**」(エゼキエル 37:16~17)という預言者の象徴的行為によって現わすように、エゼキエルに命じました。一つの杖は「**ユダ**と、それにつくイスラエルの人々のために」、もう一つの杖は「**エフライム**の杖、ヨセフと、それにつくイスラエルの全家のために」で、その両方をつないで、エゼキエルの手の中でこれらを一本の杖とするという行為です。ちなみに、ここで「**つなぐ**」と訳された原語が「カーラヴ」(קרָב)で、「互いを近づけて」「つなぐ」(joint, together)と

いう意味で使われています。「カーラヴ」(קָרַב)が天の御国の到来をあらわす二つの時系列を表わすだけでなく、神のご計画において「二つの杖をつなぎ一本の杖とする」というイスラエル全家の回復をもたらす行為としても使われています。

●さらには新約聖書で、神の約束から遠く離れていた異邦人がキリストの血によって「近い」者とされたという場合、「カーラヴ」の形容詞「カーローヴ」(קָרוֹב)が使われています。パウロによれば、ユダヤ人と異邦人、この両者を近づけて御国の「共同相続人」とすることは福音の奥義なのです。

●以上の通り「カーラヴ」は、枯れた骨であるイスラエルの全家が回復されるときにも、またユダヤ人と異邦人がつながれて「新しいひとりの人」(教会)となることも、そして「イスラエル」と「教会」が共に「御国を受け継ぐ」ことにも関係しています。さらには「天と地」がキリストにあってひとつに結び合わされることにも関係してきます。このように、ヘブル語の「カーラヴ」(קָרַב)こそ、神のご計画全体を余すところなく包み込んでいる語彙であることを心に留めたいと思います。これは教会がユダヤ的ルーツを大切にするとき、初めて見えてくるものなのです。

ベアハリート

- (1) イスラエルへの神のお取り扱いには深い意味があります。
- (2) その意味とは、イスラエルが頑なになったことで救いが異邦人に及んだことです。
- (3) ただし、イスラエルの頑なさは「異邦人の満ちる時が来るまで」です。
- (4) それゆえ、異邦人のクリスチャンたちは自分で自分を賢いと思っはなりません。
- (5) イスラエルも最終的には神の憐れみを受けて救われるからです。
- (6) ということは、イスラエルには神のご計画があり、教会がイスラエルに取って代わった(置換された)わけではありません。イスラエルと教会は区別された存在であり、教会はイスラエルに対して誇ってはならないのです。
- (7) 教会とイスラエルは、オリーブの根の豊かな養分を共に受けていることを忘れてはなりません。
- (8) 神はイスラエルを再び接ぎ合わせることができるお方です。
それは、神がイスラエルに対して結んだ「新しい契約」によるものです。
イスラエルの回復は、「神の賜物と召命とは変わることがない」という神の主権的選びのゆえです。
- (9) パウロはイスラエルの将来の回復と祝福に対する、知り尽くしがたい神の知恵の深さに、驚きと頌栄をもってローマ書 11 章を終えています。

2018.8.2
銘形 秀則